

北海道大学大学院環境科学院 環境起学専攻
実践環境科学コース

平成 30 年度 4 月入学大学院修士課程入学試験問題(秋季入試)
平成 29 年度 10 月入学大学院修士課程入学試験問題

専門科目

【開始の指示があるまで、この問題冊子を開いてはいけません】

- この冊子は 4 頁ある。
- 1 問につき 1 枚の答案用紙を使用すること。
- 答案用紙の表に書ききれない場合は裏を使用すること。
- 答案用紙には科目名と問題番号を記入すること。

平成 29 年 8 月 24 日

小論文

小論文は2問ある。問1および問2に解答せよ。

問1

あなたが行ってみたい「**提案型インターンシップ**」の具体的な案を一つ考え、a)、b)、c)で指示された事項を中心に論理的に記述せよ。

- a) 提案型インターンシップの内容と目的
- b) 環境科学もしくは持続可能性としての意義
- c) 配慮すべきことや、予想される問題点および対処方法

なお、提案型インターンシップとは、あなたが**数ヶ月～半年間程度**かけて「持続可能な社会づくりにかかわる**企画を現場に提案し、議論を重ね、現場の人とともに実施する**」ものです。この提案を入学してから行う必要はありません。

問 2 下記の(2A)、(2B)、(2C)のうち、1つを選択し、解答せよ。

(2A) 2015年国連総会で採択した「2030年までの持続可能な開発目標(SDGs)」では、多様な課題が17目標としてまとめられている(表1)。17目標は互いに独立なものではなく、総合的に取り組む必要がある。「3つ以上の目標を組み合わせた組」を3つ考え、それぞれの目標間の**関連性**について、**目標の数字を明記しながら**、論理的に記述せよ(各組4-10行程度)。なお、異なる関連性であれば、同じ目標を複数回使ってもよい。

例 1組: ②⑦⑬⑮を考え、 ②⑦⑬⑮間の関連性
 2組: ①⑤⑧⑩⑫を考え、 ①⑤⑧⑩⑫間の関連性
 3組: ①⑥⑪を考え、 ①⑥⑪間の関連性
これらについて論理的に記述すること。
なお、①は、2組と3組で異なる関連性として、2回使っている。

表 1: 2030年までの持続可能な開発目標(SDGs)の17目標

① 貧困をなくそう	⑩ 人や国の不平等をなくそう
② 飢餓をゼロに	⑪ 住み続けられるまちづくりを
③ すべての人に健康と福祉を	⑫ つくる責任 つかう責任
④ 質の高い教育をみんなに	⑬ 気候変動に具体的な対策を
⑤ ジェンダー平等を実現しよう	⑭ 海の豊かさを守ろう
⑥ 安全な水とトイレを世界中に	⑮ 陸の豊かさも守ろう
⑦ エネルギーをみんなに そしてクリーンに	⑯ 平和と公正をすべての人に
⑧ 働きがいも 経済成長も	⑰ パートナーシップで目標を達成しよう
⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう	

【次のページに続く】

(2B) カーボンプライシング(carbon-pricing)は、CO₂ 排出量に応じた価格を付加し、経済活動に組み込もうとするものとして、注目されている。炭素税や排出量取引制度もカーボンプライシングに含まれる。平成 29 年度版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書では「既に世界で我が国を含む 40 の国と 24 の地方政府が、何らかのカーボンプライシング施策を導入・検討している」と記述されている。

以下のキーワード群からキーワードを 7 つ以上用いて、**カーボンプライシング**について、「**内容や仕組み**」および「**具体的な事例や課題**」を論理的に記述せよ(12-30 行程度)。キーワードを初めて用いる際には、キーワードに下線を引くこと。なお、簡略化するため、カーボンプライシングは、「CP」と表現してよい。

キーワード群： 炭素税、排出量取引制度(ETS)、社会的費用、限界便益、限界費用、価格アプローチ、数量アプローチ、実効炭素価格、汚染者負担の原則、業界別評価、炭素リーケージ、キャップ・アンド・トレード(CAT)、環境・社会・ガバナンス(ESG)、環境ブランド、イノベーション、東京都、欧州諸国、社内カーボンプライシング(社内 CP)、企業の社会的責任(CSR)、固定価格買取制度(FIT)、固定枠制度(RPS)

(なお、これらのキーワードの下線の部分のみを解答に使用してよい)

【次のページに続く】

(2C) 平成 29 年度版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書では「我が国における国民の 3R に関する意識は総じて低下の傾向にありました(表2)。しかし、その一方で**具体的 3R 行動の実施率は、従来から大きな変化は見られませんでした。**」と記述されている。

この環境白書の記述に対する(i)(ii)(iii)について、あなたの解釈や考えを論理的に記述せよ(12-30 行程度)。

- (i) 「3R に関する意識は総じて低下の傾向にあった」ということ
- (ii) 「意識は低下している。その一方、3R 行動の実施率は変化していない」ということ
- (iii) 3R 行動の実施率の調査に用いられた設問のひとつ、「無駄な製品をできるだけ買わないよう、レンタル・リースの製品を使うようにしている」が適切な設問だったかということ

なお、3R は、Reduce(発生抑制)・Reuse(再使用)・Recycle(再生利用)を意味する。

表 2: 3R 全般に関する意識の変化(項目で示した回答数の全回答数に対するパーセンテージ)

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度
ごみ問題への関心									
ごみ問題に(非常に・ある程度)関心がある	85.9%	86.1%	82.1%	83.8%	81.2%	72.2%	71.7%	70.3%	66.3%
3Rの認知度									
3Rという言葉(優先順位まで・言葉の意味まで)知っている	22.1%	29.3%	40.6%	38.4%	41.7%	39.9%	37.2%	35.8%	36.7%
廃棄物の減量化や循環利用に対する意識									
ごみを少なくする配慮やリサイクルを(いつも・多少)心掛けている	79.3%	48.2%*	70.3%	71.7%	67.0%	59.7%	59.6%	57.8%	56.9%
ごみの問題は深刻だと思いつつも、多くのものを買い、多くのものを捨てている	7.0%	3.8%	10.0%	10.8%	11.3%	12.4%	13.6%	12.7%	14.4%
グリーン購入に対する意識									
環境に優しい製品の購入を(いつも・できるだけ・たまに)心掛けている	86.0%	81.7%	81.6%	84.3%	82.1%	79.3%	78.7%	78.3%	76.8%
環境に優しい製品の購入を全く心掛けていない	11.0%	14.0%	14.6%	12.5%	14.8%	15.0%	15.4%	15.6%	16.4%

※：2008年度調査では「ある程度心掛けている」(47.4%)という選択肢もあったことから、回答が分散したものと考えられる
注：2012年度はアンケートを実施せず
資料：環境省

平成 29 年度版環境・循環型社会・生物多様性白書(環境省, 2017)より

【試験問題はここまで】